

第 12 回超領域社会工学研究会報告書

第 12 回超領域社会工学研究会を 2019 年 9 月 28 日(土)～29 日(日)の 2 日間に亘って、「あたま 大江戸温泉物語」に於いて行いました。出席者は 8 名(男性 4 名、女性 4 名)で内、非会員の方が 2 名参加されました。発表テーマは下記の通りです。

近藤大博 特別講義『日中未来遺産 - 中国・改革開放の中の“草の根”日中開発協力の「記憶」』(岡田実著・日本僑報社)から

日中友好に多大なる貢献をされてきた近藤会長が Science Portal China に寄稿された書評に基づいてご講義頂きました。

改革開放下において、多くの民間レベルでの草の根の日中開発協力が行われてきました。著者は、日中開発協力が「ある歴史的出来事を記念・顕彰する行為 (Commemoration)」として認知され、公共の記憶として定着することを願う気持ちが込められています。黒竜江省で水稲増産に寄与した藤原長作や北京で甘いスイカ作りに貢献した森田欣一ら 4 人の業績を紹介することで、これらの事象が日中両国民に「未来遺産」として広く共有されることを願うばかりです。

長井壽満「漢詩をよむ」

発表者は眠れぬ夜に、よく漢詩を聞くとの事。漢詩を聞くことによって脳がリラックスして深い睡眠状態へトランス出来るとの事です。漢詩を作った昔の中国への想いを馳せながらトランスすると現在の憂いを忘却させる心理的効果が認められるとの事。発表では、皆さん“漢詩効果”で眠くなった目を擦りながらも真剣に漢詩の朗読を聞き、「女性としての高潔な品格」や「運命に翻弄された女性の切なる思い」を味わいながら、時空の彼方へワープするのでした。

安田裕子「Being 次元を超えたインドのスピリチュアリティ」

スピリチュアルケアの専門家としてだけではなく、四柱推命の研究者でもある発表者ご自身がインドを訪れた時に経験された事象を中心とした発表でした。自分の未来が分かるという予言書「アガ스티アの葉」についての説明では、ナディ・リーダーと呼ばれる葉を選んでその予言(ガンダム)の内容を読み上げる人が、未来を知りたい人の親指の指紋から情報を抽出して、その人の「アガスティアの葉」を選択します。これらは、バーナム効果という、星座占いなど個人の性格を診断するかのような準備行動が伴うことで、誰にでも該当するような曖昧で一般的な性格をあらわす記述を、自分、もしくは自分が属する特定の特徴をもつ集団だけに当てはまる性格だと捉えてしまう心理学の現象の一つと言って

しまえば、それまでですが一つの人生への「気付き」を生み出すきっかけとなり、当たる当たらないは別にして、自分自身を見つめ直す良い機会が得られたとの事でした。

増子保志「とんかつの相棒」

日本唯一の豚活研究家としてブログで活躍されている発表者が、とんかつ定食の相棒として重要な位置を占める「キャベツ」について、何故？何時？何処で？キャベツの千切りが付いてくるようになったのかについて、先行研究の再検討を行うとともに、中谷宇吉郎や池波正太郎などのエッセイを資料として考察されました。「とんかつ」にキャベツが付くようになったのは、昭和の初期で、発表者の研究によると、それまでは今の様な「定食」ものとしてではなく、ファストフード的なものとして流通していたのだろうとの事でした。この様に「とんかつ」という料理の受容と変容の研究から、日本の食文化の特徴が垣間見えてくるのではないかとこの事です。たかが「とんかつ」ですがされど「とんかつ」なのです。ご参考までに発表者のブログです。

(ペテンダックの御膳日記) : <https://ameblo.jp/petenduk/>

草野純子「トランスヒューマニズムと身体性」

皆さんは自分の身体の一部が機械に置き換えられたらどう思いますか？トランスヒューマニズムとは、新しい科学技術を用いて人間の身体と認知能力を進化させることで、人間の状況を前例のない形で向上させようと試みる思想です。具体的には、薬品や遺伝子操作による寿命の延長や脳とコンピュータの接続が挙げられます。しかしながら、身体はどこまでを機械化するのかについては多くの問題点があります。AI技術の発達で人間の存在そのものが不安定なものになり、バーチャルな世界の中で意識だけが生きている？存在になってしまう可能性も捨てきれません。いずれにしても「選択するのは、あなたです」

宮園圭大郎「灯台今昔物語 一尻屋崎篇一」

若手灯台研究家として唯一無二の存在である発表者が、明治9年に初灯された青森県下北半島の北東端に位置する「尻屋崎灯台」について、その歴史や実地調査に基づく外観の変遷、尻屋崎灯台の怪火伝説を中心に解説されました。怪火伝説とは、明治16年10月に不思議な光が観測されたことに端を発するもので、公式見解では「隕石」とされたものの、昭和21年5月にも灯塔の窓から発せられる光が目撃されました。灯台は前年の空襲で消灯中にもかかわらず、以前より怪火の目撃例は報告されていたとの事。原因は特定されずに、空襲時の殉職者や建設時の人柱の霊によるものではないかとされ「幻の灯台」として語り継がれて

います。結論として尻屋崎灯台は、日本の灯台史における技術的挑戦の歴史を有する一方で、非科学的な怪火伝説をも併せ持つ大変興味深い灯台であることが考察され、半島の隅にポツンと立つ灯台にも幾多の歴史が、深く刻まれていることが分かりとても興味深い発表でした。

研究発表会よりも重点が置かれる懇親会は、部屋飲みスタイルで行われ、年代物の紹興酒やブルガリア産のワイン、水割りを酌み交わしながら、それぞれの関心分野について熱く語り合い、その白熱した議論は深夜にまで及ぶものでした。途中、宿主催の「じゃんけん大会」に全員で気さくに参加し、惜しくも優勝は逃したものの楽しい時間を過ごすことが出来ました。解散後、希望者にて熱海MOA美術館を訪問し、桃山や江戸の芸術作品に触れ、改めて侘び寂びの心を学ぶという有意義なものとなりました。次回は、オリンピックイヤー（2020年）の3月28～29日に宿泊を伴った研究会を開催の予定です。

（研究部会長：増子保志）

